

## 関わり方を教える

(原文)

菊池 愛 (13 歳)

東京都

大田区立大森第六中学校

私の考える理想の教育は2つある。1つ目は、周囲の人に頼ってもよいということ教える教育だ。現在の教育では、自分が「出来ない」もしくは「分からない」ことを恥ずかしいことやいけないことだと感じ、周りに助けを求めることができない部分も多い。しかしそれでは「出来ない」「分からない」が溜まり自己嫌悪に陥ってしまう。そして自分の殻に閉じこもっていく。不登校や自殺の原因となる…。このような事態を避けるためにも周囲の人に頼ってもよいという教育は必要といえる。しかし、「それでは、周囲の人に頼ってばかりいて自分一人では何もできないような困った大人になってしまわないか。」と言う人もいるであろう。それならば、「問題を解く時に最初の1分間は自分一人で考え、分からない場合は周囲の人や先生に聞く」という方法をとればよいのだ。

具体的には、どのような活動をしていけばよいのだろうか。中学2年生5月の体育の授業。私は「体づくり運動」の一環で、「ペアの信頼関係を深める」という活動を行った。まず直立の状態から前屈をする。この時に自分の記録を確認する。それから、「背中合わせで腕を組み、二人同時に立ち上がる」「十字の状態で直立し、目を閉じたまま背後に立っているペアのもとへ倒れ込む」など様々なことを行っていく。そして最後に、ペアと手をつなぎ片方が相手に念を送りながらもう片方が再度前屈をする。すると不思議。最初に前屈をした時よりも記録が伸びているのだ。これは、作り上げてきた信頼関係が成せる技である。

このように信頼関係を築く活動を続けていけば、自分の「分からない」「出来ない」ことを恥ずかしくならず人に聞けるようになるだろう。

私の考える理想の教育の2つ目は、現在の給食の方針を変えることで実現できるものだ。現在の日本の給食では、残飯が多く出る。原因は大きく2つあり、1つ目は給食の量が多いこと。2つ目は給食を食べる時間が短いことだ。私の通っている学校の給食の時間は30分だが、準備や片付けに取られてしまい実際に食べられる時間は約10分だ。全員に給食を配り終わった時点で食缶にはまだご飯が残っている。しかし、自分に配付された分だけ食べるので精一杯なのに、おかわりをしている時間的余裕などあるわけがない。時間内に、配付された分だけでもせめて食べ切ろうとご飯をかき込むから、給食後にはとても苦しくなる。そして食缶には詰められたままのご飯や配付されたものの時間切れで食べるのできなかったご飯が多く残る。このような事態は変えていかなくてはならない。世

界では食べ物がなく飢えに苦しんでいる人も大勢いる。それなのに私達は時間がないからなどという理由で食べ物を無駄にしている。家庭でご飯を沢山食べることが出来ない子供のためにも給食の量を多くしなくてはいけないのだろう。しかしそれでも、もう少し給食の量を減らしたり、余った給食を弁当箱に入れて自宅に持ち帰っても良いという制度を作ったりはできるであろう。そのような策を取らないと、子供達は食べ物や命を軽く考えてしまうようになるかもしれない。また、世界平等について考えなくなってしまう。他者を思いやる気持ちを育むためにも給食の方針変更は必要と言える。

私の考える理想の教育は、これらのような他者との関わり方を教える教育である。